

明日香をさぐる

「壬申の乱」から『竹取物語』へ

壬申の乱で活躍した飛鳥時代の貴人たちが、時を越えて『竹取物語』に登場します。

誰もが知っている『竹取物語』。

竹の中にいた身長わずか三寸（約9センチほど）のかぐや姫がわずか3か月で成人し、その美しさから5人の貴公子や帝からのいろいろな求めにも応じずに最後は月の都へ帰っていくお話です。物語の設定や人ばなれしたかぐや姫には様々な解釈が生まれています。この物語ができたのは、9世紀後半から10世紀前半頃とされ、平安時代にあたります。作者は、『源氏物語』には紀貫之の手によるものだと書かれています。本当のところはまだわかっていません。

この『竹取物語』のなかで見どころの一つが5人の貴公子によるかぐや姫への求婚話です。5人の貴公子はかぐや姫による結婚条件に

応えることができずに全員フラれてしまいます。そのうちの一人は病にかかって亡くなってしまうた5人の貴公子たちですが、彼らはいずれも地位も名誉も高い貴族の出身です。彼ら5人は、皇族である石作皇子と車持皇子、右大臣の阿倍御主人、大納言の伴御行、中納言の石上麿足です。かぐや姫は彼らに対し、表のような入手不

可能な品を持って来ることを条件に求婚を受け入れます。

石作皇子	仏の御石の鉢
車持皇子	蓬萊の玉の枝
阿倍御主人	火鼠の皮衣
大伴御行	龍の首の珠
石上麿足	燕の子安貝

かぐや姫はそもそも実在するのかわからないような品を条件にしているのです。当然、5人はこの無理難題には応えられません。力のある人物でも手に入れられないものがある、そこには作者から権力者への強い反感を読み取ることができます。

実はこの5人には実在したモデルがあります。諸説ありますが、石作皇子は多治比真人嶋、車持皇子は藤原不比等と推定されていて、他の3人は、そのままの名前で実在したことがわかっています（石上麿足は石上麻呂）。

このモデルの5人は、672年に起きた壬申の乱以降、『日本書紀』

に登場する実在の人物です。多治比真人嶋は、宣化天皇から四代目の孫、藤原不比等は、後の奈良時代の以降に繁栄を極めた藤原氏の礎を築いた人物です。阿倍御主人と大伴御行は、大海人皇子側についた壬申の乱の功臣でした。石上麻呂は、壬申の乱において反乱側の大友皇子につきしましたが、罪を許され、政権の重臣となって後に高位を得た人物です。多治比真人嶋や阿倍御主人、大伴御行の3人は、キトラ・高松塚古墳の被葬者候補に名前を連ねるほど位の高い人物でした。

飛鳥時代後半に大活躍した5人の実在人物が、時を越えた平安時代では失敗だらけの貴公子にされてしまいました。『竹取物語』を読むと、平安時代の貴族社会の根底には、飛鳥時代後半に起きた政変後の力関係が反映されていることがわかります。つまり、飛鳥時代が後に繁栄する古代社会の基底となつているといえます。

（明日香村教育委員会文化財課）